

被災地における祭礼の復興にみられる両義的な変化について

—宮城県石巻市雄勝町 A 地区の祭礼の聞き取りと参与観察調査から—

専修大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程 田仲聡

1 目的

本報告では、東日本大震災において甚大な被害をうけた宮城県石巻市雄勝町 A 地区を調査対象地とする。震災より 2 年後、同地で行われた平成 25 年春季例祭の実現にむけた地域コミュニティとボランティア団体との「社会統合」のあり方について問題提起し、地域祭礼へのボランティア活動によって生じた変化について指摘する。そこで生じた変化はポジティブな変化だけではなく、ネガティブな変化も含まれる。本研究は、被災による地域コミュニティの変化ではなく、ボランティアによってこうむった人為的な変化を研究対象とする。

2 方法

分析の方法は以下のようなデータの抽出と加工の順序にそって行われる。平成 25 年 A 地区の春季例祭の参与観察と聞き取り調査によって得た知見をもとに、震災前後の祭礼に関するデータを抽出し、①地域コミュニティがボランティア団体との社会統合によって変化した点を取りあげる。次に、②このような震災後の変化が、震災前にはどのような姿だったのかを調査する。③最後に、被災地の祭礼において両義性をもつ変化について整理する。この両義性の基準に関しては祭礼の「伝統性」にそくしている。つまりこの「伝統性」に抵触せずに祭礼の復興に向かったものをポジティブな変化とし、逆に「伝統性」を損なうようなものをネガティブな変化とした。

3 結果

その結果、ポジティブな側面を以下のようにまとめることができる。祭礼空間は、ボランティアの無償の「労働力」や物資の提供によって、従来よりもスペクタクルなものとなった。だが、すでに述べたように、ネガティブな側面も見うけられ、ボランティアの増加によって、祭礼に参加する現地の人間の割合が下がり、祭礼の担い手の中心がボランティア側に移行してしまった。さらにボランティアの増加は、「素人の担ぎ手」が増加する可能性にもつながった。その結果、神聖な神輿を落としてはいけないという規則を守るために、定められた人数でしか神輿を担いではいけないという規則が破られた。また、神聖な対象にたいして容易にカメラを向ける人間の増加につながり、神事・祭事の規則がやぶられる可能性も大きくなった。

4 結論

被災地の祭礼研究において、現在注目されている機能の一つに、「社会統合」がある。なぜなら祭礼は、住民と、被災によって転出していった元住民が再び顔を合わせる場でもあるため、コミュニティ再構築のきっかけをつくるからである。そこにボランティアの積極的な役割が期待されている。だが、A 地区の祭礼では、ボランティアと地域コミュニティとの社会統合の結果、祭礼の担い手の中軸が、住民側からボランティア側へ、後者が前者を侵食するような形で、微妙にずれていった。つまり無償の「労働力」や支援物資を提供することによって、意図せざる結果が生じることもあり、社会統合の難しさが浮かび上がった。

文献

阿部和夫,2012,「東日本大震災による近世村落の崩壊～石巻市雄勝地区の場合～」『宮城史学(31)』
宮城教育大学歴史研究会.